

1. 調査目的等

小学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証やその改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

○NRTの学校平均偏差値を1ポイントアップさせる。(51.7 → 52.7P)
 ○NRTの「評定1」の児童数を減少させる。(16人 → 7人)

3. 指標にむけての取組

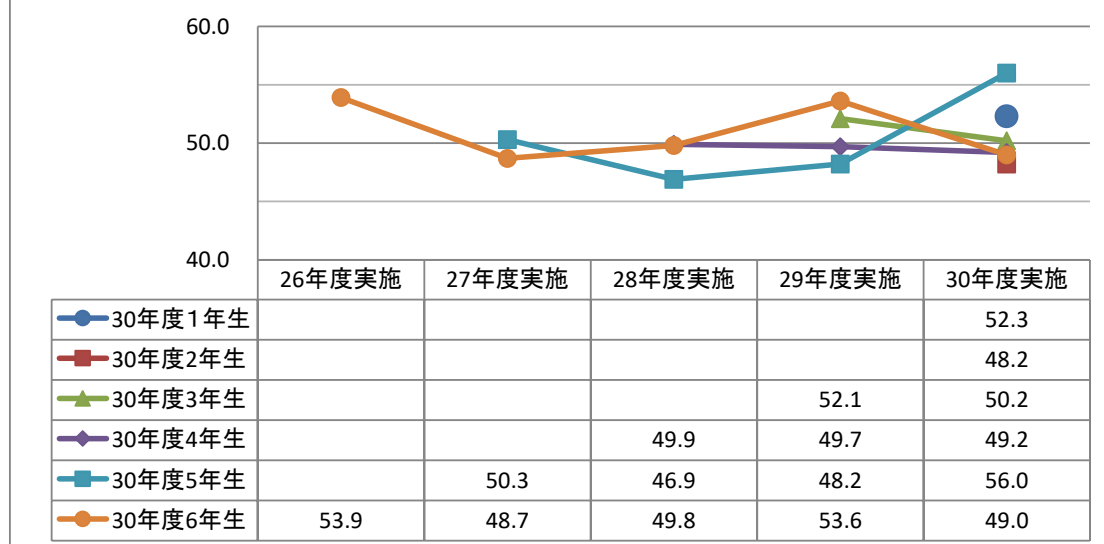
- 単元及び1単位時間において、意図的・計画的な「読む・書く・表現する」活動を設定する。
- 基礎・基本の内容を確実に習得させために、形成的評価を実施する。
- 算数の重点単元を設定し、少人数分割授業を実施する。

4. 調査結果

※学校平均5年間の推移 (標準偏差値50に対して)

年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
本校(A)	54.0	50.4	49.9	51.7	50.8
嘉麻市(B)	50.0	50.8	50.7	51.5	51.4
(A) - (B)	4.0	-0.4	-0.8	0.2	-0.6
標準偏差値との差 (A) - (50)	4.0	0.4	-0.1	1.7	0.8

各学年の推移



5. 各学校における分析

○無答率は減少の傾向にある。このことから、1単位時間及び単元において、自分の考えやふりかえりを「かく」活動を継続して行ったことは、考えを表出する力をつける上で有効だったと考える。

○国語科において、標準偏差値50を大きく上回る学年が4学年、学力の厳しい実態にある3年生においても49.6という結果が出ている。このことから、授業及び家庭学習における繰り返し指導の徹底は、有効だったと考える。算数科においては、標準偏差値に満たない学年が3学年あった。毎時間、形成的評価を行ったもののタイムマネジメントや見届けの仕方が不十分であることが要因と考える。

○算数科では、学習規律の確立及び学習意欲の向上を図ることができた。このことから、専科教員を重要単元において配置し、複数体制による少人数分割授業など、きめ細かな授業を行ってきたことは、有効だったと考える。しかし、結果から見ると、基礎学力の定着につなげることはできていない。1単位時間における指導の在り方の見直しと改善、低学力児童の補充学習、個に応じた指導の工夫が今後の課題である。

6. 各学校における今後の取組

○全教科において設定される「自分の考えを『かく』活動の更なる充実を図り、児童に必ず『かく』という意識づけの定着を図る。また、かいたものを適切に評価していくことにより、表現力の向上を目指す。

○算数科においては、全学年に専科教員を配置し、複数体制で指導を行っていく。また、3年生を学力向上の最重点学年に位置付け、重要単元において少人数分割及び習熟度別分割授業を行い、基礎学力の定着を図る。

○5校時の始まりに、5分間の「いなちゃんタイム(集中力育成トレーニング)」を設定し、午後からの学習の集中力を高め、学習に対する心構えを作る。

○家庭学習による反復学習を継続する。また、学力や学習意欲に課題がある児童には、低学力の克服も含めて、放課後の個別指導を行っていく。

○学力の根源をなす非認知能力(学ぶ意欲・自己肯定感・協働する力等)を計画的に育成する。

7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎今後の取組を具体化し推進することができるように、特に、次の3点について指導助言及び支援を行うとともに、周知徹底できるように継続的に指導する。

◆嘉麻市学力向上推進プランに設定した「書く(かく)活動」を核とした授業づくりを推進する。そのために、校内研修での授業観察指導を実施する。また、学力向上推進員による若年層の教員を対象とした授業改善指導や教育論文指導を実施する。

◆嘉麻市学力向上推進委員会に基づく学力向上検証改善委員会を開催し、単元テスト評価後の個に応じた習熟度別指導を取り入れた指導方法の工夫を推進する。そのために、習熟度別指導の単元づくりや個に応じた補充プリントの活用の仕方について指導する。

◆学力の根源をなす非認知能力の育成を推進する。そのために、「鍛ほめ福岡メソッド」の仕組みを機能させるよう指導助言を行う。